

# 朱雀帝御代の始まり

——葵巻前の空白の時間と五壇の御修法——

浅尾 広良

## 序

『源氏物語』の花宴巻から葵巻に至ると、御代替わりを終え、既に朱雀帝御代となっている。御代替わりには、桐壺帝の讓位と朱雀帝の即位、冷泉の立太子、弘徽殿女御の皇太后立后、大嘗祭、新斎宮・新斎院の卜定などさまざまな事柄が行われるが、それらは物語に一切語られていない。葵巻冒頭に語られる行事は、御代替わりに伴う新斎院の御禊の記事である。花宴巻の巻末は三月二十余日の右大臣邸での藤の花宴であり、それに続く葵巻の冒頭は四月の新斎院の御禊の記事であるため、一見そのまま繋がるようにも見えるが、その御禊を初斎院入り前のそれとするか、紫野院入り前のそれとするかで、時間の経過は大きく変わる。

る。ここに物語の時間の経過を読み解く端緒がある。

本稿は、この御禊を端緒として花宴巻からの時間の経過を考察し、斎院との比較において語られる斎宮の初斎院入りや群行にどのような特徴が見えるのか、さらに賢木巻で行われている五壇の御修法を加え、葵巻から賢木巻の朱雀帝御代の始まりをどのように読むことができるのかを考えてみたい。

## 一 斎院御禊と空白の時間

葵巻冒頭の新斎院の御禊の記事が、初斎院入り前のそれか紫野院入り前のそれかは、すでに古注の段階から議論的となっている。本章では、これがそのいずれであるのかを検証し、花宴巻から葵巻にどれほどの時間が経過したか

を考えてみたい。

『源氏物語』の年立について、いち早く自覚的に取り組んだのは一条兼良である。兼良はその著書『花鳥余情』の葵巻の最初の箇所で、花宴巻と葵巻を同じ年と考えることには六つの疑問があるとした。その要点を記すと以下の通りである。

一、花宴巻末は三月下旬、葵巻冒頭の斎院御禊は四月で、その間に讓位・立太子・源氏の任大将・斎院斎宮の卜定が行われるには短すぎる。

二、花宴巻で光源氏は宰相中将で十九歳である。葵巻が同じ年なら十九歳で大将になっている。若菜巻に二十一歳で宰相で大将を兼ねたとある言葉に矛盾する。

三、花宴巻で紫上は十二歳である。葵巻で新枕を交わしている。十二歳での結婚は若すぎる。医書にも天癸（月経）は十四歳とある。

四、冷泉は花宴巻で二歳、霽標巻で十一歳で元服する。花宴と葵を同じ年と考えると二年不足する。

五、斎院の御禊は初斎院入り前のそれと紫野院入りの前のそれがある。これは二度目の御禊である確証

がある。初度の御禊は四月にある筈がなく、またその例もない。

六、斎宮卜定も受禪後である。初斎院には去年入るはずだったと本文にあることから、讓位は本年ではなく、葵巻以前の事と知られる。

このうち、具体的な空白の時間の長さを表す徴証となるのは、二・四・五・六である。一条兼良と同じように年立に注目した本居宣長は、二の光源氏の年齢に修正を加え、霽木巻での年齢を十七としたりで花宴巻を二十歳、葵巻を二十二歳としたが、花宴巻から葵巻までに経過した時間の長さについては、兼良の見解と同じである。<sup>①</sup>二と四は、二年の経過をどこかで見ないと矛盾するというのであって、本質的には同じことを述べているとみて良い。このうち、より確実に比較検討の材料となるのは、四の冷泉の年齢である。冷泉は、紅葉賀巻で生まれ、霽標巻で十一歳で元服したとあるから、紅葉賀巻と霽標巻までのどこかの巻と巻との間で合計二年間の時間の経過を見ないと、繋がらないことになる。その時間をどこに見積もるかが問題で、一条兼良や本居宣長はそれを花宴巻から葵巻までの間に読もうとしたのである。ただし、これには原田芳起による反

論がある<sup>②</sup>。通常、新斎院が卜定されると、あまり時間を空けずに一度目の御禊を行ってそのまま初斎院に入る。そして、初斎院に入ってから約二年間斎戒潔斎した後、二度目の御禊を行って紫野院に入る。よって、これを一度目の御禊と考えれば、葵巻が始まる直前に朱雀帝の即位、および斎院の卜定があったことになり、二度目の御禊と考えれば、約二年前に即位と卜定が行われたことになる。一条兼良や本居宣長はこれを二度目と考えて、花宴巻から葵巻までの間に二年の時間が経過したとし、原田は一度目と考えて葵巻を花宴の翌年の即位の年とし、さらに花散里巻を賢木巻の翌年として合計二年の経過を見ようとしたわけである。

そこで、原田芳起が一条兼良の説を批判し、これが初斎院入り前だとする根拠とした二点について検証を加えてみたい。その第一は、先の五の斎院が四月に初斎院入りした例がないことについて、原田はその例が『源氏物語』以後にはいくつもあり、『源氏物語』が歴史に影響を及ぼしたと見ることができるとしたこと、第二に、御禊の供奉について、初度の御禊は「勅使参議一人のみ供奉」とする兼良の理解は間違っているとする点である。

原田の主張の一点目について、確かに『源氏物語』以後

の後一条天皇の御代、選子内親王の後に斎院となった磐子内親王は長元五（一〇三二）年四月二十五日に初斎院に入っている。その他では、後朱雀天皇御代の娟子内親王が長元十（一〇三七）年四月十三日に、堀河天皇御代の令子内親王が寛治四（一〇九〇）年四月九日に、鳥羽天皇御代の官子内親王が天仁二（一一〇九）年四月二十日に、崇徳天皇御代の統子内親王が大治三（一一二八）年四月十四日に、禧子内親王が長承二（一一三三）年四月十八日にそれぞれ初斎院入りしている。このように『源氏物語』以後には、斎院が四月に初斎院入りする例をいくつも見いだすことができる。さらに原田は『年中行事秘抄』の四月の条に、

初斎院御禊年雖<sub>二</sub>八日不<sub>レ</sub>當<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>。灌仏停止事。

長暦元年寛治四年例也。【近代多雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>當<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>。初斎院年停止。】

経頼記云。長暦元年四月三日斎宮良子。入<sub>二</sub>大膳職<sub>一</sub>。

同八日雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>當<sub>二</sub>神事<sub>一</sub>。依<sub>二</sub>伊勢賀茂斎院禊<sub>一</sub>無<sub>二</sub>灌

仏<sub>一</sub>。同十三日丙辰斎院娟子。入<sub>二</sub>右近府<sub>一</sub>。

康和三年四月八日灌仏如<sub>レ</sub>常。同十三日初斎院入<sub>二</sub>御紫野<sub>一</sub>。

天永元年四月八日灌仏如<sup>③</sup>常。同十三日初齋院入<sup>③</sup>御紫野<sup>③</sup>。

とあるのを根拠として、齋院が四月に初齋院に入ることがむしろ慣例だったと述べる。しかし、この『年中行事秘抄』の記述は、齋宮と齋院の初齋院が四月に行われたために灌仏会が停止された例を記し、その後初齋院の年に神事がなくとも灌仏会が停止されるようになったことを述べているのであつて、四月に初齋院入りすることが慣例となつた事実を述べているのではない。ここに挙がつているのは、齋宮良子内親王（後朱雀天皇御代）、齋院娟子内親王（後朱雀天皇御代）・令子内親王（堀河天皇御代）・禎子内親王（堀河天皇御代）・官子内親王（鳥羽天皇御代）で、これを慣例と言うのなら、後朱雀天皇御代以降、院政期を中心に行われたとみるべきであらう。原田は、これらを根拠として、

源氏物語以前の実例は、初齋院入り四月というのが記録にないが、絶無であつたという証もまたない。（中略）源氏物語以前を積極的に証することはできないが、その直後の齋院の初度御禊が四月にあつたということが、当時の有職家の見解は四月初度禊を容認し支

持したであらうということを思わせるに十分である。（中略）源氏物語の賀茂の御禊が、当時初度のそれであると理解されて、文学が逆に歴史に影響したものである<sup>④</sup>。もある<sup>④</sup>。

と述べ、『源氏物語』の葵巻の新齋院御禊が初齋院入りの前のそれだと断ずる。ここで問題となるのは、四月の初齋院入りが『源氏物語』以前まで溯り得るのかどうか、『源氏物語』の例がその後の歴史に影響を与えたと言ひ得るのかどうかである。今のところ調べられた齋宮・齋院の任官表を巻末に掲載した。これで分かるように、齋宮・齋院の卜定や齋宮の野宮入りや群行、齋院の紫野院入りの日付けは記録として比較的残っているものの、初齋院入りの日付けははっきりわからないものが多い。この中で、『源氏物語』成立以前で齋院が四月に初齋院入りした例を探すと、醍醐天皇御代の齋院韶子内親王と円融天皇御代の齋院選子内親王の二例を見出すことができる。ただし、最初の韶子内親王は、前任の齋院宣子内親王の薨去を受けて、延喜二十一年（九二一）年二月二十五日に新齋院に卜定されるものの、初齋院入りする前に延喜二十二（九二二）年二月に貞頼親王が、そして同年十一月には是忠親王が薨去し、さらに延

喜二十三（九二三）年三月には皇太子保明親王が薨去してしまつたために大幅に遅れ、延長二（九二四）年四月十四日にやっと初斎院入りの例である。卜定から初斎院まで実に三年二ヵ月も経過した特異な例であつて、これを通常と見るには問題がある。そうなると、通常の例で斎院が四月に初斎院入りした初例は、選子内親王となり、その後

『源氏物語』成立以後となる後一条天皇御代の斎院馨子内親王が続いたことになる。<sup>⑤</sup>勿論、記録として残っていないものの中に、四月初斎院入りの例がある可能性は残るものの、後代に影響を残すほどの四月初斎院入りの前例はない。むしろ、五十六年三ヵ月もの長きに亘つて斎院であり続けた選子内親王が前例となり、久しぶりに卜定された斎院馨子内親王も四月に初斎院入りしたことで、後代に強く影響を与えた可能性が高いのではないか。さらに、次の後朱雀天皇御代の斎宮・斎院の初斎院入りがいずれも四月に行われたことで、これ以降も踏襲されるようになったと考えるべきである。『源氏物語』の葵巻が歴史に影響を与えた可能性については、全く否定はできないものの、葵巻の御禊を初斎院入りの前のそれと解釈している古注釈書が一つもなく、そもそも初斎院入り前のそれかどうかという議

論そのものが室町時代に成立した『花鳥余情』以降でしか行われてないことから、低いと言わざるを得ない。史実に徴する限り、『源氏物語』成立以前には、斎院の初斎院入りはむしろ四月にはほとんど行われなかつたと見る方が妥当性がある。

次に原田が挙げる二点目の御禊の供奉についてである。原田は、『延喜式』の初斎院の供奉人に関する記述を一条兼良は読み誤つていると指摘する。『延喜式』巻六「斎院司」に載る初斎院の際の供奉人に関する記述は以下の通りである。

勅使参議一人。院別當一人。五位四人。六位四人並前  
駟。左右近衛。左右兵衛各二人。左右門部各二人。左  
右火長各十人供奉。左右京職官人率兵士已上迎候。  
山城国司率郡司候京極路。辨一人。史一人。史生  
二人。官掌一人。率供奉諸司。就禊所行事。<sup>⑥</sup>

『花鳥余情』は、物語の御禊を二度目のそれであるとして次のように記す。

初度の禊の事は此物語にみえず いま此巻にいへるは  
野宮へ入給はんとての二度の御はらへをいへり その  
故は初度の禊には勅使参議一人供奉す 二度禊には大

納言中納言参議以下あまた供奉す 毎年の禊には公卿一かうに供奉せす 此卷云御禊の日かんたちめかすささたまりたる事なれとかたちあるをえらせ給ふ 延喜式に二度の禊の勅使には大納言中納言各一人参議二人四位五位各四人すへて十二人の勅使なり これをかすさたまるといへり 源氏の大将は参議二人の中なるへし これをもてこれをいふに此卷にいへるは二度の禊うたかひなき物也<sup>⑦</sup>

一条兼良が「初度の禊には勅使参議一人供奉す 二度禊には大納言中納言参議以下あまた供奉す」と述べていることに對して、原田は次のようにその誤りを指摘する。

厳密に言えば勅使は供奉人ではないのである。(中略) 延喜式の「勅使参議一人」とあるのは御禊供奉の諸卿が一人というのでは決してなく、勅使が一人というので、当然なことである。「前驅」はただ「左右近衛」のようにあるから、中將が出ても大将が出てても延喜式には違反することはないわけである。(中略) 葵の物語で、源氏が「とりわきたる宣旨」で前驅に加わつたとしても、別にそれが初度でないことを証するほどのこととは考えられない。延喜式の前驅の定めのみ、で

も、左右近衛左右兵衛以下が、中將でも大将でも任ずることが可能であるから、いくらでも重くすることはできる。西宮記を見ると、二度めの御禊でも「齋院御前、参議有<sup>レ</sup>障不<sup>レ</sup>可奉仕」とか「元慶無<sup>レ</sup>公卿御前」とかいうこともあつたのであり、実際は初度必ずしも軽からず、二度必ずしも重からず、というのが現実であつたらしい。<sup>⑧</sup>

初齋院の場合でも、中納言や参議が供奉する例があり、『延喜式』で述べる内容は、兼良の言うように「勅使参議一人供奉」するわけではないという。確かに歴史上には初齋院の供奉人に上達部がなる例があり、かつ光源氏は「とりわきたる宣旨」によつて参加したことを考えると、『延喜式』の規定から外れることもあり得るのだろうが、『源氏物語』葵卷の御禊の箇所の記事を見ると、原田は大事な内容に触れていない。それは、

御禊の日、上達部など数定まりて仕うまつりたまふわざなれど、おほえことに容貌あるかぎり、下襲の色、表袴の紋、馬、鞍までみなとのへたり、とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ。

(葵② 二〇―二二頁)<sup>⑨</sup>

と、この日の御禊に供奉する上達部が「数定まりて仕うまつりたまふわざ」と人数に既に決まりがあるという記述である。これは御禊に上達部が複数名が供奉することが前提であるとの語り方である。それが今回はさらに上達部の中でも容貌の良い人たちを集め、下襲の色や表袴の紋、馬や鞍まで揃えるという徹底ぶりなのであり、この供奉人に光源氏も加わるのである。『延喜式』初斎院の供奉の上達部だと規定では「勅使参議一人」となり、勅使が供奉人でないとなると、上達部は誰もいなくなってしまうのである。そうすると、これはむしろ『延喜式』の二度目の御禊の供奉人に関する記述の、

勅使大納言。中納言各一人。参議二人。四位。五位各四人。内侍一人。辨一人。外記。史各一人。太政官史生一人。辨官史生二人。官掌一人。神祇。内蔵。縫殿。陰陽。大蔵。宮内。大膳。木工。大炊。主殿。掃部。造酒。主水。左右馬等官省職寮司供奉。

上達部として「勅使大納言。中納言各一人。参議二人」と数名が供奉し、勅使の大納言を除いたとしても三人の上達部を従える姿と考えた方が妥当であろう。原田は、『長秋記』や『中右記』などの実際の御禊に供奉した人々の記録

から、「勅使参議一人」ではないことを述べるが、物語においては「とりわきたる宣旨」によって加わったのは光源氏一人とみるべきであろう。そうすると、この御禊を初斎院前の御禊と考えるには、かなり無理があることが判明する。

このように見えてくると、新斎院の御禊は、初斎院入り前のそれではなく、紫野院入り前の二度目の御禊と考えざるをえず、そうすると最初の年立の問題は、花宴巻から葵巻までの間に二年の時間が経過していると考える一条兼良や本居宣長の説の方が妥当だという結論に至る。

## 二 朱雀帝即位時の想定と葵巻の特徴

前節の結論を承けて、花宴巻と葵巻の間に二年の時間の経過を読んだ場合、その二年の空白の間にどのような経緯があったのかを次に考えてみたい。実は、花宴巻と葵巻の間に二年の時間の経過を読み、斎院の御禊を二度目のそれと考えた場合でも、物語の時間との間に見逃せない齟齬が生じると指摘するのが今井上である。<sup>10)</sup> 今井は、二年の経過を説く現行の年立の中で、新斎宮と新斎院の卜定がいつ行われたかを考察し、「斎院もまた、斎宮同様、花宴巻の同

年ではなく、花宴巻と葵巻の間に挟まれた空白の年のどこかで卜定されたと考えられる」とし、その前提となる「桐壺帝の退位も、通説通り、花宴と葵に挟まれた、語られざる一年の間の出来事と見てよからう」と述べながら、次のような疑問を呈している。

葵巻と花宴巻に挟まれた空白の年のどこかで卜定されたと考えられる齋院が、翌年の夏、葵巻頭の段階で、はやくも二度目の御禊を済ませ、紫野の本院入りを果たして葵祭に供奉する（それが『花鳥余情』以来の通説）というのは、どうしたことであろうか。齋院の二度目の御禊は、どれほど速やかに執り行われたとしても、卜定の翌年にそれをすましてしまうことには、かなり無理があるのではないか。<sup>11)</sup>

葵巻の前年（すなわち空白の年）の正月に桐壺帝の讓位とそれに伴う新齋院の卜定があったとしても、葵巻の夏までには一年三ヵ月程度の時間があるにすぎず、新齋院が二度目の御禊に辿り着くまでの時間としてはあまりに短すぎるといのである。今井は、さらに賢木巻での雲林院に籠もった光源氏が、紫野院にいる朝顔齋院のことを思い出して文を送るという場面を取り上げ、朝顔齋院が賢木巻の二

年目の春に卜定されているながら同年秋に紫野院に入っているのは疑問だとして、作者紫式部が生きた時代には大齋院選子内親王が長きに亘って齋院の座にいたために、かえって齋院制度への理解を疎くし、齋院の描かれ方に限界をもたらしことになったのではないかと結論づける。<sup>12)</sup> 今井が指摘する二点の疑問のうち、後半の賢木巻の記述に関しては、物語本文には「吹きかふ風も近きほどにて、齋院にも聞こえたまひけり」（賢木<sup>②</sup> 一一九頁）とあり、雲林院が紫野院の近くであったからこそ、齋院のことを思い出したという文脈であって、この齋院を紫野院という場所限定せずとも、齋院となった朝顔のことと考えれば、さして問題とはならないであろう。実際、古注では『細流抄』が「<sup>13)</sup> 謹齋院也。賀茂ちかき渡りなるゆへ也<sup>14)</sup>」と人物のことで理解し、古注の中で問題とはされていない。これを場所と考えて朝顔が紫野院にいるのが不審だとするのは現代注になってからである。<sup>14)</sup> そうなると、前半で指摘した卜定から二度目の御禊までの時間の短さこそが問題となるが、今井の述べるように、本当に葵巻の前年に齋宮と齋院の卜定は行われたのかどうか。紫式部は齋院制度への理解が疎いと結論する前に、物語に語られた内容の特徴を歴史上の齋宮



・齋院との比較から明らかにする必要がある。

今井が葵巻の前年に齋宮・齋院の卜定があつたと理解する根拠は、新齋宮の初齋院入りに関する記述による。新齋宮秋好の初齋院入りについて、物語は「齋宮は、去年内裏に入りたまふばかりしを、さまざまさはることありて、この秋入りたまふ。」(葵② 三七頁)とあり、去年宮中の潔齋所に入る予定であつたものが、遅れて今年―すなわち葵巻の一年目―になって、ようやく宮中の中の便所―すなわち初齋院―に入ったというのである。これについて今井は次のように述べている。

もし、彼女が花宴巻の同年に卜定されていたとすると、この新齋宮は卜定の翌々年の秋まで、宮中にさえないままであつたということになってしまう。この時代、齋宮が卜定から宮中の便所に入るまでに費す時間は長くても一年程度(規子内親王の場合。天延三年(九七五)二月二七日卜定、貞元元年(九七六)二月二六日宮中入り)、たいていは三ヵ月から十ヵ月程度であるから、これはちょっと考えられない長さである。(中略) そうなると、新齋院の卜定期間もおのずと限定されてくる。この弘徽殿腹の女三宮も、葵巻頭

における新齋宮の卜定の話題につづいて「その頃、齋院も下りぬ給ひて、后腹の女三宮ぬ給ひぬ」(②二〇)、それと時期的に前後して卜定されたところからで、つまり齋院もまた、齋宮同様、花宴巻の同年ではなく、花宴巻と葵巻の間に挟まれた空白の年のどこかで卜定されたと考えられるのである<sup>15)</sup>。

つまり、御代替わりに伴う新齋宮・新齋院の卜定が時期的に前後して行われ、齋宮の卜定から初齋院入りは長くても一年程度であり、かつ去年までに入るはずだったという本文から、卜定が花宴巻と同じ年とすると「考えられない長さ」が経ったことになる。よって花宴巻の翌年(葵巻の前年)に卜定があつたというのである。しかし、これは新齋宮秋好の卜定から初齋院入りを基準にした場合に導かれる見解であつて、基準をどこに置くかで見え方は変わってくる。例えば、花宴巻の年に卜定があつたとすれば、今回の齋院の御禊まで約二年の時間が経過して、齋院の二度目の御禊までの時間としては何ら不審はない。代わりに新齋宮秋好の初齋院入りが異常に遅かつたとも言ひ換えられる。また、山本利達が指摘するように齋宮とすべき適任者がいなかったために人選に手間取り、齋院決定の翌年

（葵巻の前年）に前坊の姫君が齋宮に定められた可能性――<sup>16</sup>そもそも齋院と齋宮が同じ年に卜定されていない可能性――とて考えられるのである。

そこで、何を前提に考えるべきかを明らかにするために、歴史上での天皇の即位に伴う新齋宮・新齋院の卜定から初齋院入り、そして伊勢群行と紫野院入りまでのあり方を通覧してみたい。巻末の表にある通り、齋宮は天皇毎に交代するものの、齋院は天皇毎に交代するとは限らない。

このうち、『源氏物語』の朱雀帝と同じように、天皇の即位とともに齋宮と齋院が一緒に交代した例は、一条天皇御代までで見ると、嵯峨・仁明・文徳・清和・陽成・宇多・朱雀・冷泉の各天皇御代である。このうち、嵯峨天皇は、齋院を創設した天皇で、齋宮の卜定の後に、葉子の変を契機に新たに齋院を創設したのであり、正確には御代替わりに伴う交代の例ではない。よって、これを外して、仁明から冷泉までで見ると、宇多を除いて、齋宮と齋院の卜定はいずれも同日に行われていることに気づく。宇多の御代のみ、齋宮卜定の十一日後に齋院卜定が行われているが、同月のことであり、これもほぼ一緒に行われたと考えて問題はない。となると、天皇の御代交代に伴って齋宮と齋院が

交代する場合は、同日もしくは同じ月のうちに行われたと考えられる。史上の初齋院入りの日を見ると、清和天皇御代が同日に行われたことが判る。それ以外では、冷泉天皇御代が二日違い、宇多天皇御代が三日違い、朱雀天皇御代では約三ヵ月違いであり、必ずしも同じ日とは限らないようである。ただし、齋宮の伊勢群行と齋院の紫野院入りの日程を見ると、卜定から約二年後の同じ年の四月に齋院の紫野院入りが行われ、九月に齋宮の伊勢群行が行われている。仁明・文徳・清和・宇多・朱雀の各天皇の御代ではそれが明確に確認できる。冷泉天皇御代は齋宮が伊勢へ群行する前に天皇の退位があったため、群行は行われなかった。そして、陽成天皇御代では、齋宮が伊勢に群行した元慶三（八七九）年の四月に齋院も紫野院入りするはずのところ、同年三月二十三日に太皇太后正子内親王が崩御したために延期となり、翌元慶四（八八〇）年四月に紫野院入りすることになったのである。以上をまとめると、天皇の御代交代に伴って齋宮と齋院の卜定が行われる場合は、ほぼ一緒の日程で卜定が行われること、初齋院入りの日程は齋宮と齋院で必ずしも同じではないが、齋宮群行と齋院紫野院入りは原則同じ年に行われるということである。

これをもとにして、『源氏物語』の朱雀帝即位に伴う齋宮と齋院を考えてみると、理解の前提となっている内容が明らかとなる。それは、齋宮と齋院の卜定が、同日かほぼ同じころに行われていたはずであり、よって齋宮の群行と齋院の紫野院入りも同じ年に行われるはずだったということである。『源氏物語』本文では、先に齋宮卜定の話があり、その後で齋院の卜定のことと語られているが、齋宮の卜定が齋院卜定の翌年に持ち越されたような文脈もない。前節で述べた通り、花宴巻から葵巻までに二年の時間が経過していたと考えられるから、花宴巻の年に桐壺帝讓位と朱雀帝即位、そして齋宮と齋院の卜定があれば、二年後の葵巻の冒頭で二度目の御禊が行われても何ら不審はない。従来は即位を花宴巻の翌年と考えたことにより、齋院の二度目の御禊までの時間が不足する事態となったのである。そして、卜定から二年を経過しているのだから、葵巻の最初の年に齋宮の群行も行われるはずだった。ところが、物語を読むと、葵巻の冒頭では、まだ初齋院にすら入っていないという異常事態が起こっている。車争いがあつたことを聞いた光源氏が六条御息所を心配する場面には、

御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておは

するものを、いかに思しうむじにけん、といとほしくて参<sup>まう</sup>でたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮<sup>もと</sup>におはしまさば、櫛<sup>くし</sup>の憚<sup>はまか</sup>りにことつけて、心やすくも対<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>したまはず。

（葵② 二六―二七頁）

と、まだ自宅にすることが判る。葵上が物の怪に苦しみ、六条御息所が生霊になっているとの噂が御息所のもとに届いたところに、「齋宮は、去年内裏<sup>こぞううち</sup>に入りたまふべかりしを、さまざまはることありて、この秋入りたまふ。」（葵② 三七頁）と語られてくるのであって、これは本来なら齋院と同じく一昨年中に初齋院に入るはずが延期となり、さらに「遅くとも昨年中には入ることになっていたが、さまざまな障りがあったために」二年後の秋に入ることになったとの意ではないのか。異例であるのは、齋院の方ではなく齋宮の方で、そのために伊勢群行が本来より一年遅れてしまったと考えられるのである。今井は、齋宮の卜定から初齋院入りは長くても一年程度で、ここまでずれ込むのは「考えられない長さ」と述べるが、同じようなことは歴史上でも起こっている。例えば陽成天皇御代の一人目の齋院敦子内親王は、先述した通り元慶三（八七九）年四月に紫野院入りするはずが、同年三月に太皇太后正子内親王の崩

御によつて一年延期となり、元慶四（八八〇）年四月十一日に紫野院に入っている。卜定から三年後のことである。また陽成天皇の二人目の斎院穆子女王は、元慶六（八八二）年四月九日に卜定され、同年七月二十四日に初斎院入りし、二年後の元慶八（八八四）年に紫野院に入るはずが、同年二月に天皇の突然の讓位があり一年延期となった。さらに、仁和元（八八五）年四月に紫野院に入るはずが、八日に辨官に死の穢れがあつたため延期となり、六月二十八日に入っている。これらは途中で一年延期となり、卜定から群行まで三年かかった例だが、先述した醍醐天皇御代の斎院韶子内親王の場合は、皇族関係者の死が相次いだため、卜定から初斎院までに三年二ヵ月、卜定から群行に至つては五年二ヵ月もかかつている。障りがあつたことで斎宮秋好の群行が一年遅れる事態になったことは、史上の例に徴してもさしておかしなことではない。

そのように考えると、先の斎宮の初斎院入りの記事は、さいぐう斎宮は、こぞうち去年内裏に入りたまふべかりしを、さまざまさはることありて、この秋入りたまふ。九月には、ののみやがて野宮に移ろひたまふべければ、たたび二度の御祓のいそぎとり重ねてあるべきに、ただあやしうほけほけしう

て、つくづくと臥しなやみたまふを、宮人いみじき大事にて、御祈禱などさまざま仕うまつる。おどろおどろしきさまにはあらず、そこはかとなって月日を過ぐしたまふ。大將殿も常にとぶらひきこえたまへど、まさる方のいたうわづらひたまへば、御心の暇なげなり。

（葵② 三七頁）

ただでさえ大幅に遅れている初斎院入りがやつと行われ、九月にはずゞ野宮に入るはずであるのに、物の怪事件によつて斎宮の母の六条御息所が病氣がちとなつてしまつたため、斎宮に仕える人々は「いみじき大事」と思うのである。これで六条御息所が亡くなりでもしたら、斎宮の伊勢群行そのものが取りやめになる危機的状況だからである。光源氏にしても、正妻葵上の病氣と六条御息所の病氣の二つに苛まれて心の暇もないという。六条御息所と葵上の確執は、葵上の死という結果となり、

みやすじこかの御息所は、さいぐう斎宮は左衛門の府に入りたまひにければ、いとどいつくしき御淨まはりにことつけて聞こえも通ひたまはず。

（葵② 五〇頁）

かく心より外に、若々しきもの思ひをして、つひにうき名をさへ流しはてすべきこと、と思し乱るるに、な

は例のさまにもおはせず。さるは、おほかたの世につけて、心にくくよしある聞こえありて、昔より名高くものしたまへば、野宮の御移ろひのほどにも、をかしういまめきたること多くしなして、殿上人てんじやうじんどもの好ましきなどは、朝夕の露分け歩あゆくをそのころの役になむするなど聞きたまひても：

（葵② 五三頁）

と、齋宮の初齋院入り、それに続く野宮入りが、葵上の死を哀悼する文脈の中に挟み込まれている。

このように、従来花宴巻の翌年に桐壺帝の譲位と朱雀帝の即位、それに伴う齋宮と齋院の卜定を想定したがゆえに、初齋院にいる期間が短くなり、齋院の御視が二度目としても不審が残ったわけだが、朱雀帝の即位を花宴巻の年と想定すれば何ら齟齬は起こらない。そして、朱雀帝御代の特異性は、齋院の紫野院入りと齋宮の伊勢群行が同じ年に行われなかったことにこそある。「とまどまどさではあること」（葵② 三七頁）の内実は不明だが、歴史上で延期になった例はいずれも皇親等の死が障りであったから、齋宮が初齋院入りできなかったのも、ひとまず同様の理由と考えられよう。つまり、朱雀帝が即位した後に齋宮と齋院の卜定がほぼ一緒に行われ、先に齋院が初齋院入りし、その後には

齋宮が初齋院入りする前に誰かが亡くなり、齋宮の初齋院入りが翌年に延期になるも、今度は翌年にも誰か宮廷内の死が相次いだことで、翌々年にまで延期となったということであろう。すなわち、齋宮の初齋院入りが二年もずれ込んだのは、そうした〈死〉の障りが相次いだことを示唆する。葵上の死は初齋院入りの障りとはならないが、これを含めると、こうした〈死〉の連鎖が朱雀帝御代の最初に集中して起こっていたことになる。

### 三 五壇の御修法の背景

葵巻の翌年、賢木巻の九月に齋宮は伊勢に下向し、その後の十一月に今度は桐壺院が崩御する。その翌年は諒闇となり、正月行事等は一切中止となるが、右大臣・弘徽殿大后は着々と権力基盤を強めていることが除目や臘月夜の尚侍就任等から窺い知れる。これによって右大臣方と左大臣方との亀裂は次第に深まっていく。その過程で語られているのが、五壇の御修法である。これは尚侍となった臘月夜が光源氏と弘徽殿の細殿で密会する背景として語られているが、これは本来帝と関わって行われる修法である。本文には、

帝は、院の御遺言<sup>みでん</sup>たがへずあはれに思したれど、若うおはしますうちに、御心なよびたる方に過ぎ<sup>かた</sup>て、強きところおはしまさぬなるべし、母后<sup>ははきさき</sup>・祖父大臣<sup>おはおと</sup>とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政御心<sup>まつりごと</sup>にかなはぬやうなり。わづらはしさのみまされど、尚侍<sup>かむ</sup>の君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくともおぼつかなくはあらず。五壇<sup>ごだん</sup>の御修法<sup>みぎふ</sup>のはじめにてつつしみおはします隙<sup>ひま</sup>をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。かの昔おぼえたる細殿<sup>ほそどの</sup>の局<sup>つぼね</sup>に、中納言<sup>ちゅうなごん</sup>の君紛らはして入れたてまつる。

(賢木② 一〇四―一〇五頁)

と、朱雀帝が桐壺院の遺言を守ろうとしてもままならないことが語られ、次に臘月夜尚侍と光源氏の密会のことがあり、その背景に五壇の御修法が語られる。五壇法は、中央に不動明王、東段に降三世明王、南段に軍荼利明王、西段に大威徳明王、北段に金剛夜叉明王の五大明王を勧請して同時に修する密教修法である。四方に段を設けるのは四方から侵入する邪気を祓うためで、中央の不動明王によって息災・長寿・増益などを祈るのである。言い換えれば、何らかの邪気の侵入がある、もしくはあることを怖れること

が前提となつて行われる修法である。問題はなぜここで五壇の御修法が行われているかだ。

史上の五壇の御修法については既に森茂暁によつてその修法の意味および変遷がまとめられているので、森に導かれながらここの修法実施の意味を考えてみたい。『源氏物語』が執筆された一条天皇の御代、寛弘五(一〇〇八)年までで見ると、九例の五壇法の実施記録が見いだせる。日付けと場所、理由を列挙すると以下の通りである。

①延長八(九三〇)年七月二十一日 常寧殿

②天慶三(九四〇)年二月十八日 法性寺五大尊御前  
「内裏御修法始」「為降伏東西兵乱」

③天慶三(九四〇)年八月二十九日 延暦寺 「南海

賊事」

④応和元(九六一)年閏三月十七日 叡山大日院

⑤康保四(九六七)年八月十一日 禁中 「私云、公家御祈敷」「主上、東宮不豫、新帝即位並立太子、天変等有之、為此等御祈、何時被修之哉、委記可尋之」

⑥天元四(九八二)年八月十六日 場所不明 「為公家御祈、五大尊御修法被修之」

⑦永祚元（九八九）年夏 中堂 「摂政藤原朝臣病悩  
之間、中堂に：五大尊法を令修たり」

⑧長徳三（九九七）年五月二十二日 場所不明 「宮  
五壇法始之。」

⑨寛弘五（一〇〇八）年九月十一日 土御門殿 「或  
記云、後一条天皇降誕、御母上東門院」

内容を具体的にみると、①は延長八年七月二十一日に常寧殿で行われた五壇法で、六月二十六日に清涼殿の未申の柱に落雷して藤原清貫等が震死する事件が起こり、これによって醍醐天皇が不豫となったのを発端とする。天皇は七月二日に清涼殿から常寧殿に遷御し、十五日には御咳病を得る。七月二十日にも雷鳴があり、翌二十一日に天皇の御座所である常寧殿で天台阿闍梨五人によって五壇法が行われた。これは、落雷を菅原道真の祟りと解釈し、その邪気を祓い天皇の病氣平癒を目的として行われた修法である。しかし、病氣は平癒せず九月二十二日に皇太子寛明親王（朱雀天皇）に譲位し、二十九日に崩御に至っている。②と③の天慶三（九四〇）年の例は、「為降伏東西兵乱」とあるように、平将門と藤原純友の所謂承平天慶の乱に依る。天慶三年には年明けから将門や純友調伏のためのさまざまな

修法が行われている。正月実施の主だったものだけでも、三日に延暦寺や東寺等八所で修法が行われ、十三日に諸社に奉幣して兵乱鎮定を祈り、十四日に法琳寺で大元帥法を修せしめ、二十一日には諸社諸大寺で仁王経転読、二十二日には延暦寺で大威徳法を修し、二十四日に延暦寺と南神宮寺で修法を修し、三十日には石清水・賀茂・住吉の三社に奉幣して東西の兵乱を祈禳している。この流れを承けて行われたのが、二月十八日と八月二十九日の五壇法である。いずれも宮中ではなく、法性寺や延暦寺といった寺で行われている。④の例は村上天皇御代で、前年の天徳四（九六〇）年から天変や疫病が流行し、五月四日には藤原師輔が薨去、九月二十三日には内裏が炎上するという大事件が起こる。翌天徳五年は村上天皇の厄年にあたり、かつ辛酉革命の年であるため二月十六日に元号を応和元年に改められる。その後二月二十六日には春の仁王会が行われ、三月四日には七大寺、延暦寺、東西寺に諷誦を修せしめ、天下安穩・息災延命を祈願している。閏三月十七日に行われた五壇法は比叡山大日院であり、同日には天皇のいる冷泉院の東対で権僧正寛空が孔雀経法を修している。醍醐天皇の例で見たように、天皇に何かあった場合は、その傍で

修法を行っているから、孔雀経法は天皇の息災のために修され、五壇法は叡山大日院で行っていることから天下安穩のためであろう。⑤の康保四年は、村上天皇が五月二十五日に崩御され、皇太子憲平親王（冷泉天皇）が踐祚した年で、八月に入って「聖体不豫」とあるから、十一日に行われた五壇法は、冷泉天皇の不豫が原因と考えられる。禁中で行われたことも天皇のあり方と強く関わっていると見て良い。⑥の例は円融天皇御代で、天元四年には聖体不豫の記述が頻出する。三月二十五日、七月二十九日、八月三日、八月八・九日、八月二十六日に「御薬事」の記録があるから、八月十六日の五壇法も天皇の病氣平癒を祈願してのものか。ただし、場所が不明であることと「為公家御祈」とあるのが気になるところである。⑦は一条天皇が十歳の年で、摂政藤原兼家の病悩とあるから、天皇ではなく天皇を代行する摂政兼家の病氣平癒を祈願した例である。⑧は、太皇太后昌子内親王の病氣平癒を祈願した例、⑨は一条天皇中宮藤原彰子が土御門殿で敦成親王を産む時に行われた修法である。このように見てくると、寛弘五年以前に行われた五壇の御修法は、大きく見て二つの場合に分けられることが判る。その一つは天皇（もしくは天皇を代行

する摂政）の病氣平癒や出産など貴人の体調と関わる例で、二つ目は天下安穩など国家の危機的状況と関わる例である。両者で異なるのは修法が行われている場所、病氣や出産の例では病人の傍で行われるのに対して、国家危急の場合は延暦寺や法性寺など寺で行われている。さらに、最初の頃は天皇主導で行われるが、一条天皇御代のころになると藤原摂関家が主導して行われるようになっていく。

賢木巻の五壇の御修法が、どのような理由で、どこで行われているのかなど、その詳細は一切語られていない。ただし、史上の朱雀天皇御代にあったような地方の叛乱等は考えにくい。残るは朱雀帝や右大臣そして弘徽殿太后らの不豫が考えられるが、そのような兆しも語られていない。しかし、史上の五壇法の例はかなり切迫した状況の中で行われていない。そうなると、語られてはいないが、史上④・⑤のように、天皇の崩御や天皇の後見の薨去など、邪気の侵入を怖れる深刻な事態を朱雀帝が抱えていたと考えるのが一番可能性が高い。先述した通り、斎宮の初斎院入りの遅れは「さまざまさはること」（葵② 三七頁）が原因であり、それは皇親の〈死〉である可能性が高いことを述べた。その後を語った葵巻では葵上が亡くなり、次



の年の賢木巻では桐壺院が崩御している。五壇の御修法はこの連続性の中で行われ、かつ弘徽殿太后や祖父右大臣がそれぞれにやることに帝が異を唱えられないとする文脈の中で語られていることからすると、帝の意思というより右大臣や弘徽殿太后の意向が強く反映して行われたのかもしれない。また、修法を行っている場所は、国家安穩を祈願するなら延暦寺などとも考えられるが、帝への邪氣侵入を防ぐ意味で行われたのであれば、帝の御在所の傍とも考えられ、そうなると清凉殿など宮中で行われたことになる。この時、光源氏と臘月夜は弘徽殿の細殿で密会しているから、すぐ傍らで五壇法は行われていたかもしれない。五壇の御修法の初日、天皇が重く謹慎し、修法の音が響く中、二人の密会が行われていたことになる。

以上に見るように、光源氏と臘月夜の密会の背景に語られてくる五壇の御修法も、朱雀帝即位以来の「さまざまさはること」(葵② 三七頁)と桐壺院の崩御の連続性の中で実施された可能性が高い。朱雀帝御代は邪氣の侵入を防ぐ五壇法をやらねばならぬほど、深刻な事態を背景として抱えていたことになる。

## 結

葵巻の冒頭に語られるのは、新斎院の二度目の御禊、すなわち紫野院入り前の御禊と考えられる。そうすると、年立で問題となっていた二年の時間の経過は、花宴巻と葵巻の間に見るのが適当であることが判り、卜定から二年経過して二度目の御禊を行ったと見ると、桐壺帝の讓位と朱雀帝即位は花宴巻と同じ年に行われていた可能性が高い。紅葉賀巻末の「春宮の御世、いと近うなりぬれば」(紅葉賀① 三四七頁)と桐壺帝が語ったこと、および花宴巻冒頭の桜の花宴が讓位に向けた儀礼であったことと関連し、花宴巻の後、さほど時間を空けずに讓位は行われたと考えられる。花宴巻末に臘月夜が「春宮には、四月ばかりと思し定めたれば」(花宴① 三六二頁)とあるのは、朱雀の即位に合わせた入内、もしくはその直前での参内を意識した内容であったのだろう。史上の例に徴して、新帝即位に伴う新斎宮と新斎院の卜定はほぼ同じ頃にされたと考えられるから、本来なら斎院の二度目の御禊があった年の秋九月に斎宮が伊勢に群行するはずであった。ところが、さまざまな障りが連続して起こってしまったために、斎宮の初斎

院入りが大幅に遅れ、伊勢への群行も当初より一年遅れることになってしまったのである。そして、こうなった理由こそが、皇室内での〈死〉であったと考えられる。朱雀帝御代は、即位から二年経ってもまだ斎宮が初斎院にすら入れない異常事態を抱えていたことが判り、その間にあったであろう皇親の〈死〉の穢れを背景に抱え込んでいたことが判る。新斎院の二度目の御禊と紫野院入りは、人前に現れない朱雀帝にとって、帝の威徳や威厳を皆に見せる大事なデモンストレーションの場であったはずが、皮肉にもそれが六条御息所の怨霊化の契機となり、新たな〈死〉を招くことになる。そしてその翌年には、桐壺院の崩御が続くのである。賢木巻で行われる五壇の御修法は、こうした朱雀帝御代の背景にある深刻な〈死〉の連鎖が帝に及ぶことを怖れた修法であったと読むことができる。

物語は、桐壺帝から朱雀帝への譲位、朱雀帝の即位、それに伴う斎宮・斎院の卜定など即位当初の主だった内容を何も語らない。しかし、斎院の紫野院入りの御禊が行われた年に、斎宮がまだ初斎院にすら入っていなかったと語ること、朱雀帝御代が当初から抱えていたであろう問題ははしなくも露呈していることを我々は知るのである。

注

- (1) 本居宣長『源氏物語年紀考』に「花宴巻 源氏二十歳の春の事也、諸抄十九歳とす、誤也」とし、「葵巻 源氏廿二歳より、廿三歳の正月迄のこと見えたり。諸抄廿一二歳とするは誤也」(『本居宣長全集』第四巻 筑摩書房)による。
- (2) 原田芳起「源氏物語年立論への疑い―葵の巻前後の部分構図について―」(『国語と国文学』第37巻第5号 昭和35(一九六〇)年5月)
- (3) 『年中行事秘抄』本文の引用は『群書類従』第六輯による。なお【】内は割注。
- (4) 原田芳起「源氏物語年立論への疑い―葵の巻前後の部分構図について―」注(2)に同じ
- (5) 『左経記』の長元五年正月二十七日条によれば、当初斎院御禊は三月十一日と四月二十五日の二案があった経緯が記されている。
- (6) 『延喜式』本文の引用は、『新訂増補 國史大系』(吉川弘文館)による。
- (7) 『花鳥余情』本文の引用は、源氏物語古注集成『松永本花鳥余情』(桜楓社)による。
- (8) 原田芳起「源氏物語年立論への疑い―葵の巻前後の部分構図について―」注(2)に同じ
- (9) 『源氏物語』本文の引用は小学館刊行新編日本古典文学全集『源氏物語』により、巻名・巻数・頁数を記した。

- (10) 今井上「『源氏物語』の死角―賀茂斎院考」(『国語国文』第81巻第8号 九三六号 平成24(二〇一二)年8月)
- (11) 今井上「『源氏物語』の死角―賀茂斎院考」注(10)に同じ
- (12) 今井上「『源氏物語』の死角―賀茂斎院考」注(10)に同じ
- (13) 『細流抄』本文の引用は、『内閣文庫本 細流抄』源氏物語古注集成(桜楓社)による。
- (14) 新潮古典集成(昭和52(一九七七)年)が「今年冬までは宮中の初斎院に入らずであるが、何らかの事情で早く紫野の院に入ったものか」と述べたのを契機として、この後に出た完訳日本の古典『源氏物語』(昭和58(一九八三年)が「今年春卜定の朝顔の斎院がここにいるのは不審」とし、岩波書店新日本古典文学大系(平成5(一九九三年)や小学館新編日本古典文学全集(平成7(一九九五年)、『源氏物語』の観賞と基礎知識』(平成12(二〇〇〇年)などが「不審」とする注を引き継ぐ。
- (15) 今井上「『源氏物語』の死角―賀茂斎院考」注(10)に同じ
- (16) 山本利達「斎宮と斎院」(『講座源氏物語の世界』第三集 有斐閣 昭和56(一九八二)年)
- (17) 森茂暁「五壇法の史的探究」(九州文化史研究所紀要)第39号 平成6(一九九四年3月)・同「五壇法修法一覽」(『福岡大学人文論叢』第30巻第1号(通巻第一一六号) 平成10(一九九八年6月)
- (18) 森茂暁「五壇法修法一覽」(注(17)に同じ)によれば八例挙げられているが、『日本紀略』によって③の用例を新たに補った。
- (19) この記録はすべて『小右記目録』による。
- (20) 拙稿「宮廷詩宴としての花宴―『源氏物語』「桜の宴」攷―」(『大阪大谷大学紀要』第47号 平成25(二〇一三年2月)
- (本学日本語日本文学科教授)

歴代斎宮斎院表

| 歴代 |      | 斎宮 |     |                |                             | 斎院 |     |   |     |    |
|----|------|----|-----|----------------|-----------------------------|----|-----|---|-----|----|
| 元正 | 久勢女王 | 才  | 父・母 | 卜定<br>群行<br>退下 | 霊亀元か<br>霊亀3・4・6<br>養老5・5・9前 | 日付 | 斎院名 | 才 | 父・母 | 日付 |
|    |      |    |     |                |                             |    |     |   |     |    |





|          |  |  |              |  |  |          |  |  |           |  |  |           |  |  |           |  |  |              |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
|----------|--|--|--------------|--|--|----------|--|--|-----------|--|--|-----------|--|--|-----------|--|--|--------------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|----------------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|----------|--|--|---------|--|--|
|          |  |  | 醍醐           |  |  |          |  |  | 宇多        |  |  |           |  |  | 光孝        |  |  |              |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
|          |  |  | 柔子内親王        |  |  |          |  |  | 元子女王      |  |  |           |  |  | 繁子内親王     |  |  | 揭子内親王        |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
|          |  |  |              |  |  |          |  |  |           |  |  |           |  |  |           |  |  |              |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
|          |  |  | 宇多天皇<br>藤原胤子 |  |  |          |  |  | 本康親王      |  |  |           |  |  | 光孝天皇      |  |  | 文德天皇<br>藤原今子 |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
| 退下       |  |  | 群行           |  |  | 初齋       |  |  | 退下        |  |  | 群行        |  |  | 初齋        |  |  | 退下           |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
| 延長8・9・22 |  |  | 昌泰2・9・8      |  |  | 昌泰元・8・22 |  |  | 寬平9・7・3   |  |  | 寬平3・9・4   |  |  | 寬平2・9・5   |  |  | 仁和5・2・16     |  |  | 仁和3・8・26 |  |  | 仁和2・9・25 |  |  | 仁和元・9・13 |  |  | 元慶8・3・22 |  |  | 元慶7・8・24       |  |  | 元慶6・4・7  |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
|          |  |  |              |  |  |          |  |  |           |  |  |           |  |  |           |  |  |              |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
| 韶子内親王    |  |  | 宣子内親王        |  |  | 恭子内親王    |  |  | 君子内親王     |  |  | 直子女王      |  |  |           |  |  |              |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  | 穆子女王           |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
| 4        |  |  | 14           |  |  | 2        |  |  |           |  |  |           |  |  |           |  |  |              |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |                |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
| 源和子      |  |  | 醍醐天皇         |  |  | 源封子      |  |  | 醍醐天皇      |  |  | 藤原鮮子      |  |  | 醍醐天皇      |  |  | 宇多天皇<br>橘義子  |  |  | 惟彦親王     |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  | 時康（光孝）<br>正如王女 |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
| 退下       |  |  | 紫野           |  |  | 初齋       |  |  | 退下        |  |  | 紫野        |  |  | 初齋        |  |  | 退下           |  |  | 紫野       |  |  | 初齋       |  |  | 退下       |  |  | 紫野       |  |  | 初齋             |  |  | 退下       |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |          |  |  |         |  |  |
| 延長8・9・22 |  |  | 延長4・4・20     |  |  | 延長2・4・14 |  |  | 延喜21・閏6・9 |  |  | 延喜17・4・16 |  |  | 延喜15・5・18 |  |  | 延喜5・4・19     |  |  | 延喜3・2・10 |  |  | 寬平7・4・16 |  |  | 寬平5・6・19 |  |  | 寬平5・3・14 |  |  | 寬平4・12・1       |  |  | 寬平3・4・15 |  |  | 寬平元・9・23 |  |  | 仁和5・2・27 |  |  | 仁和3・8・26 |  |  | 仁和元・6・28 |  |  | 元慶6・7・24 |  |  | 元慶6・4・9 |  |  |

|                   |                   |                   |                   |                   |                   |                   |                   |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 朱雀                |                   | 村上                |                   | 冷泉                |                   | 円融                |                   |
| 雅子内親王             | 齊子内親王             | 徽子女王              | 英子内親王             | 悦子(旅子)女王          | 樂子内親王             | 輔子内親王             | 隆子女王              |
| 22                | 16                | 8                 | 26                | 6                 | 4                 | 16                |                   |
| 醍醐天皇<br>源周子       | 醍醐天皇<br>源和子       | 重明親王<br>藤原寛子      | 醍醐天皇<br>藤原淑姬      | 重明親王<br>藤原寛子      | 村上天皇<br>莊子女王      | 村上天皇<br>藤原安子      | 章明親王<br>藤原敦敏女     |
| 卜定<br>初齋          | 卜定<br>初齋          | 卜定<br>初齋          | 卜定<br>初齋          | 卜定<br>初齋          | 卜定<br>初齋          | 卜定<br>初齋          | 卜定<br>初齋          |
| 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 |
| 婉子内親王             |                   | 尊子内親王             |                   |                   |                   |                   |                   |
| 28                |                   | 3                 |                   |                   |                   |                   |                   |
| 醍醐天皇<br>藤原鮮子      |                   | 冷泉天皇<br>藤原懷子      |                   |                   |                   |                   |                   |
| 卜定<br>初齋          | 紫野                | 紫野                | 退下                | 退下                | 退下                | 初齋                | 紫野                |
| 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 | 承平元・<br>12・<br>25 |

|   |  |  |  |   |  |
|---|--|--|--|---|--|
| 後朱雀   | 後一条  | 三条   | 一条   | 花山  |  |
| 良子内親王   | 婢子女王   | 当子内親王  | 恭子女王                                       | 濟子女王  | 規子内親王  |
| 8   |  | 12   | 3  |   | 27   |
| 後朱雀天皇<br>禎子内親王  | 具平親王<br>為平親王女  | 三条天皇<br>藤原城子   | 為平親王<br>源高明女                               | 章明親王<br>藤原敦敏女   | 村上天皇<br>徽子女王   |
| 退下<br>群行<br>野宮<br>初齋<br>卜定                                | 退下<br>群行<br>野宮<br>初齋<br>卜定                               | 退下<br>群行<br>野宮<br>初齋<br>卜定                               | 退下<br>群行<br>野宮<br>卜定                       | 退下<br>野宮<br>初齋<br>卜定                                    | 退下<br>群行<br>野宮<br>初齋<br>卜定                               |
| 寬德2・正・16<br>長曆2・9・11<br>長曆元・9・17<br>長元10・4・3<br>長元9・11・28 | 寬仁2・9・8<br>寬仁元・9・21<br>長和5・9・15<br>長和9・2・19              | 長和5・正・29<br>長和3・9・20<br>長和2・9・27<br>長和8・8・21<br>寬弘9・12・4 | 寬弘7・11・7<br>永延2・9・13<br>永延元・9・8<br>寬和2・8・8 | 寬和2・6・23<br>寬和元・9・26<br>寬和元・9・2<br>永觀2・11・4<br>永觀元・8・27 | 貞元2・9・16<br>貞元元・9・21<br>貞元元・9・26<br>天延3・2・27<br>天延3・2・27 |
| 娟子内親王   | 馨子内親王  |  |  |   | 選子内親王  |
| 5   | 3  |  |  |   | 12   |
| 後朱雀天皇<br>禎子内親王  | 後一条天皇<br>藤原威子  |  |  |   | 村上天皇<br>藤原安子   |
| 退下<br>紫野<br>初齋<br>卜定                                      | 退下<br>紫野<br>初齋<br>卜定                                     | 退下   |  |   | 退下<br>紫野<br>初齋<br>卜定                                     |
| 寬德2・正・16<br>長元10・4・13<br>長元9・11・28                        | 長元9・4・17<br>長元6・4・9<br>長元5・4・25<br>長元4・12・16<br>長元4・9・22 |  |  |   | 貞元2・4・16<br>貞元元・4・22<br>天延3・6・25<br>天延3・4・3              |



|   |  |   |  |  |  |   |  |
|---|--|---|--|--|--|---|--|
| 堀河  |  | 白河  |  | 後三条  |  | 後冷泉   |  |
| 善子内親王   |  | 媞子内親王   |  | 俊子内親王  |  | 敬子女王  |  |
| 11  |  | 3   |  | 14   |  |   |  |
| 藤原道子<br>白河天皇  |  | 藤原賢子<br>白河天皇  |  | 藤原茂子<br>後三条天皇  |  | 源則理女<br>敦平親王  |  |
| 群野卜<br>行宮定  |  | 退群野初<br>下行宮齋定   |  | 退群野卜<br>下行宮定   |  | 退群野初<br>下行宮齋定   |  |
| 寛治3・9・15<br>寛治2・9・13<br>寛治元・9・21<br>應徳4・2・11            |  | 承暦4・9・22<br>承暦3・9・15<br>承暦3・9・8<br>承暦2・8・1<br>承保4・8・2 |  | 延久5・2・16<br>承保元・2・17<br>承保2・9・20<br>承保元・8・16             |  | 治暦5・2・9<br>天喜元・4・19<br>永承7・9・14<br>永承7・9・28<br>永承6・4・25<br>永承6・10・7 |  |
| 令子内親王   |  | 齊子女王  |  | 佳子内親王  |  | 正子内親王   |  |
| 12  |  |   |  | 14   |  | 14  |  |
| 藤原賢子<br>白河天皇  |  | 源政隆女<br>小一条院  |  | 藤原茂子<br>後三条天皇  |  | 藤原延子<br>後朱雀天皇   |  |
| 退紫初<br>下野齋定   |  | 退下  |  | 退下   |  | 退下  |  |
| 康和元・6・20<br>寛治5・4・20<br>寛治4・4・9<br>寛治3・6・28<br>寛治3・4・12 |  | 承保元・12・8<br>延久5・5・7<br>延久5・3・11<br>延久4・7・6            |  | 延久元・10・28<br>延久元・7・24<br>康平3・4・12<br>天喜6・6・27<br>天喜6・4・3 |  | 永承3・4・12<br>寛徳3・3・24  |  |

[illegible]

|    |               |          |                |          |               |          |               |           |               |          |           |           |
|----|---------------|----------|----------------|----------|---------------|----------|---------------|-----------|---------------|----------|-----------|-----------|
| 安徳 |               |          | 高倉             |          | 六条            |          | 二条            |           | 後白河           |          |           |           |
|    | 功子内親王         |          | 惇子内親王          |          | 休子内親王         |          | 好子内親王         |           | 亮子内親王         |          | 喜子内親王     |           |
|    | 2             |          | 11             |          | 10            |          |               |           | 10            |          |           |           |
|    | 高倉天皇<br>藤原公重女 |          | 後白河天皇<br>藤原公能女 |          | 後白河天皇<br>藤原成子 |          | 後白河天皇<br>藤原成子 |           | 後白河天皇<br>藤原成子 |          | 堀河天皇      |           |
|    | 退下            | 野宮       | 退下             | 群行       | 初齋            | 退下       | 野宮            | 初齋        | 退下            | 野宮       | 初齋        | 退下        |
|    | 治承3・正11       | 治承2・9・13 | 治承元・10・28      | 承安2・5・3  | 嘉応2・9・10      | 嘉応元・9・27 | 仁安3・2・19      | 仁安2・9・21  | 仁安元・6・12      | 永暦元・6・25 | 保元3・9・25  | 保元3・8・11  |
|    | 範子内親王         |          | 頌子内親王          |          | 僖子内親王         |          | 式子内親王         |           |               |          |           |           |
|    | 2             |          | 27             |          | 11            |          |               |           |               |          |           |           |
|    | 藤原成範女         |          | 高倉天皇<br>藤原実能女  |          | 鳥羽天皇<br>中原師元女 |          | 後白河天皇<br>藤原成子 |           |               |          |           |           |
|    | 退下            | 紫野       | 初齋             | 退下       | 初齋            | 退下       | 紫野            | 退下        | 退下            | 退下       | 退下        | 退下        |
|    | 治承5・正14       | 治承4・4・12 | 治承3・4・9        | 承安元・8・14 | 承安元・6・28      | 嘉応3・2・22 | 嘉応2・4・22      | 嘉応元・10・20 | 嘉応元・7・26      | 永暦2・4・16 | 平治元・10・25 | 平治元・閏5・19 |

（注）『平安時代史事典』（資料・索引編）の角田文衛編、西井芳子増訂「伊勢斎宮表」「賀茂斎院表」を参考としながら、史料により一部訂正を加え、斎宮の卜定時の年齢および斎院の初斎院入りの日程を付け加えた。年齢は数え年である。「初斎」とは初斎院入りの日程、「紫野」は紫野院入りの日程である。